

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会

こくどみだ とき きじんみだ ゆえ ばんみんみだ
国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る。

002 立正安国論 りっしょうあんこくろん

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会 27ページー2行

にんのうきよう こくど みだ まえ きじん みだ
(仁王経に)「国土が乱れるときは、まずその前に鬼神が乱れ
きじん みだ ばんみん なや ばんみん みだ
る。鬼神が乱れて万民を悩ますがゆえに、万民が乱れるのである」
とあります。

げどう しよせん ないどう い すなわ さいよう
外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。

005 開目抄 かいもくしやう

ぶつぽう しやかい
仏法と社会 53 ページ 4 行

賢王けんおうの世よには道理どうりかつべし、愚主ぐしゅの世よに非道先ひどうさきをすべし

005 開目抄かいもくしょう

仏法ぶつぽうと社会しゃかい 63 ページ 17 行

てんは ちあき
天晴れぬれば地明らかなり。 法華を識る者は世法を得べき
か。

によらいのめつこのごのひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう
006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会146ページー15行

てん は だいち しぜん あか
天が晴れば大地は自然に明るくなります。 法華を識る者

だいしょうにん てん は よ なか じしょう とうぜんあき
（大聖人）は天が晴れるごとくで、世の中の事象も当然明らかに
し
知ることがでくるのです。

せけん ひとびと もち

いったん 愚

「世間の人々の用いねば」とは、一旦のおろかのことな

かみ おんもち

とき たれびと もち

り。上の御用いあらん時は、誰人が用いざるべきや。その

とき もち

なに

ひと しん ほう しん

時はまた用いたりとも何かせん。人を信じて法を信ぜず。

しもやま(し)しょうそく

013 下山御消息

ぶつぼう しやかい

仏法と社会 301 ページ 5 行

しょうほう

くに

おさ

にんみん

じゃおう

だいさん

「正法もて国を治め、人民を邪枉せず。これを第三の

さんげ しゆ

な

ねはんぎよう

い

いつさいせけん

げどう

懺悔を修すと名づく」。涅槃経に云わく「一切世間の外道

きようしよ

みな

ぶつせつ

げどう

せつ

しかん

の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」。止観に

い

ふか

せほう

し

すなわ

ぶつぽう

云わく「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」。

ぐけつ

い

れいがくさき

は

しんどうのち

ひら

弘決に云わく「礼楽前に駆せて、真道後に啓く」。

さいなんたいじしやう

025 災難対治抄

ぶつぽう

しやかい

仏法と社会
456 ページ 15 行

「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」

038 当体義抄

仏法と社会 614 ページ 13 行

（法華經方便品に）「是の法は、法位に安住していて、九界それ

ぞれが違った姿でありながら、妙法の悟りを得てみれば衆生、

仏とともに一体なのである」とあります。

世間の法には、
下剋上・背上向下は国土亡乱の因縁な
り。

(
046 善無畏抄

仏法と社会
668 ページ 17 行

わ おもて み

我が面を見ることは明鏡によるべし、国土の盛衰を計

みようきよう

こくど せいすい はか

ぶつきよう

過

ることは仏鏡にはすぐべからず。

しんこくおうごしよ

(047 神国王御書

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

678 ページー5 行)

ぶつぽう 亡 ひと くに さか ひと じゆ なが ぶつぽう っ くに
仏法に付きて国も盛え人の寿も長く、また仏法に付いて国
もほろび人の寿も短かるべしとみえて候。
見 そうろう

047 神国王御書

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会 678 ページ 7 行

おうぼう

ま

こなみ

こかぜ

だいきく

だいにん

うしな

王法の曲がるは小波・小風のごとし。 大国と大人をば失

ぶつぼう

とが

おおかぜ

おおなみ

こぶね

破

いがたし。 仏法の失あるは大風・大波の小舟をやぶるがご

くに

うたが

とし。 国のやぶること疑いなし。

しんこくおうごしよ

(047 神国王御書

ぶつぼう

しやかい

仏法と社会 678 ページー10 行)

いっこく

せいじ

あやま

ちい

かぜ

なみ

一国の政治が誤っているのは小さな風や波がたつようなもの

くに

おとな

りつぱ

ひと

で、その国や大人（立派な人）をほろぼすようなことはありません。

あやま

ぶつぼう

しんぼう

おお

かぜ

なみ

ちい

ふね

しかし、誤った仏法を信奉すれば、大きな風や波が小さな船をの

いっこく

まちが

みこむように、一国をもほろぼしていくことは間違ひありません。

えんぎよう

こころ

いちごう

わく

だん

ゆえ

いつさいほう

みな

円教の意は一毫の惑をも断ぜず。故に、「一切法は皆こ

ぶつぽう

い

れ仏法なり」と云うなり。

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしyou

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会 714 ページ 11 行

三力 さんりき

一切衆生力 いっさいしゆじようりき

法力 ほうりき

自身功德力 じしんくどくりき

(092 日月の事 にちがつ こと)

仏法と社会 ぶつぽう しゃかい

979 ページ 7 行

そう

しじよくぞうぎやく

とき あつ

しんにぞうぎやく

「相とは、四濁増劇にしてこの時に聚まれり。瞋恚増劇

とうびようお

とんよくぞうぎやく

きが お

ぐち

にして刀兵起こり、貪欲増劇にして飢餓起こり、愚癡

ぞうぎやく

しつえきお

さんさいお

ゆえ

ぼんのう

増劇にして疾疫起こる。三災起こるが故に、煩惱ますま

さか

しよけんうた

さか

す隆んに、諸見転た熾んなり」。

おんぎくでん

（095 御義口伝

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

1000

ページー1行)

ぶつぽう

漸

てんどう

せけん

じよくらん

ぶつぽう

仏法ようやく顛倒しければ、世間もまた濁乱せり。仏法

たい

せけん

影

たいま

かげ

斜

は体のごとし、世間はかげのごとし。体曲がれば影ななめ

なり。

(145 諸経と法華経と難易の事

しよきよう

ほけきよう

なんい

こと

ぶつぽう

しやかい

仏法と社会 1346 ページー10 行)

ぶつぽう

みだ

しよしゆう

せいじゃ

さか

仏法がしだいに乱れて諸宗の正邪が逆さまになってきたので、

せけん

にご

みだ

ぶつぽう

たい

せけん

世間もまた濁り乱れてきました。仏法は体のようなもので、世間は

かげ

たい

ぶつぽう

ま

かげ

影のようなものです。体である仏法が曲がっていれば、その影であ

せけん

こんらん

る世間もななめになる (混乱する) のです。

げてんさんぜんよかん

せいどう そうい

よ よ にご あ

外典三千余卷は、政道の相違せるに依つて代は濁ると明か

ないてんごせん

しちせんよかん

ぶつぽう

びやつけん

よ

よにご

す。内典五千・七千余卷は、仏法の僻見に依つて代濁る

明

そうろう

いま

よ

げてん

そうい

ないてん

べしとあかされて候。今の代は、外典にも相違し内典に

いはい

ふた

たいかいっこく

お

も違背せるかのゆえに、二つの大科一国に起こつて、すで

ぼうこく

そうろう

に亡国とならんとし候か。

おおたどののにようぼうごへんじ

そくしんじようぶつしやう

(159 大田殿女房御返事 (即身成仏抄))

ぶつぽう

しやかい

仏法と社会 1384 ページ 1 行

げんこう

とき

しょう

さんさい

減劫の時は小の三災おこる。

けかち えきびよう かつせん
ゆわゆる飢渴・疫病・合戦

けかち

だいたん

起

疫

病

愚癡

なり。飢渴は大貪よりおこり、やくびようはぐちよりおこ

かつせん

しんに

いま

にほんこく

ひとびとしじゅうくおく

り、合戦は瞋恚よりおこる。今、日本国の人々四十九億

くまんしせんはつびやくにじゅうはちにん

なんによ

ひとびと

異

おな

九万四千八百二十八人の男女、人々ことなれども、同じ

ひと

さんどく

なんみようほうれんげきよう

きよう

く一つの三毒なり。いわゆる、南無妙法蓮華経を境とし

起

さんどく

ひと

しゃか

たほう

じつぽう

ておこれる三毒なれば、人ごとに、釈迦・多宝・十方の

しよぶつ

いちじ

罵

責

なが

失

すなわ

諸仏を一時にのり、せめ、流しうしなうなり。これ即ち

しょう

さんさい

ついで

小の三災の序なり。

そやどのごへんじ

りんだおう

こと

167 曾谷殿御返事 (輪陀王の事)

仏ぶつ法ぽうと社しゃ会かい

1446

ペー
ジ
13
行

ごせつく

しだい

あん

みようほうれんげきよう

ごじ

まず、五節供の次第を案ずるに、妙法蓮華經の 五字の

しだい まつ

しょうがつ

みよう

いちじ

祭

てんしょうだいじん

次第の祭りなり。正月は妙の一字のまつり、天照太神

とし かみ

さんがつみつか

ほう

いちじ

たつ

を歳の神とす。三月三日は法の一字のまつりなり。辰をも

かみ

ごがついつか

れん

いちじ

うま

つて神とす。五月五日は蓮の一字のまつりなり。午をもつ

かみ

しちがつなのか

け

いちじ

まつ

さる

かみ

て神とす。七月七日は華の一字の祭りなり。申をもつて神

くがつこのか

きよう

いちじ

いぬ

かみ

とす。九月九日は經の一字のまつり、戌をもつて神と

このころえ

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

す。かくのごとく心得て、南無妙法蓮華經と唱えさせ給

げんぜあんのん

のち

ぜんしよ

しょう

うたが

え。「現世安穩にして、後に善処に生ず」疑いなかるべ

し。

(169 秋元殿御返事

ぶつぼう しゃかい

仏法と社会 1455 ページー13 行)

ごせつく せつく ゆらい かんが

まず五節供(節句)の由来を考えてみると、これは、

みようほうれんげきよう ごじ しだい まつり しょうがつ みよう いちじ

妙法蓮華經の五字の次第の祭なのです。正月は妙の一字の

まつり てんしょうだいじん さいしん さんがつみつか ほう いちじ まつり

祭で、天照太神を歳神とします。三月三日は法の一字の祭

たつ しゅしん ごがついつか れん いちじ まつり うま しゅしん

で、辰を主神とします。五月五日は蓮の一字の祭で、午が主神で

しちがつなのか げ いちじ まつり さる しゅしん くがつここのか きよう

す。七月七日は華の一字の祭で、申が主神です。九月九日は経

いちじ まつり いぬ しゅしん せつく

の一字の祭で、戌が主神とされます。このようにいつも節供も

みようほうごじ まつり こころ なんみようほうれんげきよう とな

妙法五字の祭と心えて南無妙法蓮華經と唱えていきなさい。そ

げんせ あんのん

うすれば、かならず現世は安穩であり、後世には善処にうまれるこ

まちが

とは間違いないところです。

こうせい

ぜんしよ

いまよ
今の世には、

なにとなくとも道心どうしんおこりぬべし。
発

きょうだいししょう
171 兄弟抄

ぶつぼう しゃかい
仏法と社会
1474 ページ 7 行

ひと よろこ た た てん きちずい ち たいしやく
人の悦び多々なれば、天に吉瑞をあらわし、地に帝釈の
どう ひと あくしんさか てん きようへん ち きようよう
動あり。人の悪心盛んなれば、天に凶変、地に凶天
しゅつたい しんに だいしよう したが てんぺん だいしよう ちよう
出来す。瞋恚の大小に随つて天変の大小あり。地天も
またかくのごとし。

（202 瑞相御書 ずいそうごしよ）

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会
1552 ページー17行

なかつかさのさぶろうざえもののじよう

しゅ おん

ぶつぽう おん

「中務三郎左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ため

せけん こころ 根

にも、世間の心ねも、よかりけり、よかりけり」と、

かまくら

ひとびと

くち

謳

たま

鎌倉の人々の口にうたわれ給え。

すしゅんてんのうごしよ

さんしゅざいほうごしよ

(210 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会 1596 ページ 7 行)

なかつかさのさぶろうざえもののじよう

しゅくん

ぶつぽう

中務三郎左衛門尉は、主君のためにも、仏法のためにも、

せけん たい

こころ

ひじよう

りつぱ

かまくら

ひと

世間に対する心がけも、非常に立派であると、鎌倉の人びとから

くちぐち

口々にいわれるようになりなさい。

おん 宮 仕

ほけきよう

思

いっさいせけん

ちせい

御みやづかいを法華経とおぼしめせ。「一切世間の治生

さんぎよう

みなじつそう

あいはいはい

産業は、皆実相と相違背せず」とは、これなり。

だんおつぼうごへんじ

256 檀越某御返事

ぶつぼう

しゃかい

仏法と社会 1719 ページ 1 行

つと

しごと

ほけきよう

かんが

てんだいだいし

まかしかん

勤め（仕事）が法華経とお考えなさい。天台大師が摩訶止観のな

せけん

よ

おさ

じつそう

かで「すべての世間の世を治め生活をするすべなどは、みな実相

ぶつぼう

いはい

（仏法）と違背しない」といっているのはこのことです。

みなもと 濁

源にぎりぬれば、ながれきよからず。身まがれば、かげ

流 清

み 曲

影

直

なおからず。

いちのさわのにゆうどうごしよ

(271 一谷入道御書

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

1759

ページー17行)

ほうみよう

ゆえ にんたつと

にんたつと

ゆえ ところたつと

「法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊し」と

もう

申すはこれなり。

なんじようどのごへんじ ほうみようになき こと

(340 南条殿御返事 (法妙人貴の事))

ぶつぽう しゃかい

仏法と社会 1924 ページ 6 行

ほう みよう

とうと

ひと とうと

「たもつ法が妙であり尊ければ、それをたもつ人が尊い。た

ひと とうと

ひと せいかつ ところ とうと

もつ人が尊ければ、その人の生活する所もまた尊いのである」

だいしようにん みのぶさん ほう と しゃくそん

というのは、このこと (大聖人が身延山で法を説くことが釈尊

りようじゆせん おと

の霊鷲山にも劣らないこと) です。

げんこう

もう

ひと

こころ

うち

そうろう

とん

じん

ち

さんどく

減劫と申すは人の心の内に候。

貪・瞋・癡の三毒が

しだい

ごうじよう

成

しだい

ひと

命

次第に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちも

縮

背

小

罷

つづまり、せいもちいさくなりもてまかるなり。

(363 減劫御書

げんこうごしよ

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

1966

ページー 6 行)

まつだいじよくせ

こころ

とんよく

しんに

ぐち

末代濁世の心の貪欲・瞋恚・愚癡のかしこさは、いかな

けんじん

しょうにん

おさ

る賢人・聖人も治めがたきことなり。

げんこうごしよ

(363 減劫御書

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

1967

ページー8行)

いま まっだいあくせ

せけん あく

しゅつせ ほうもん

だいあく

今、末代悪世に、世間の悪より出世の法門につきて大悪

しゅつしよう

知

いま ひとびとぜんこん

修

出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれ

よ

滅

しゅつたい

ば、いよいよ代のほろぶること出来せり。

(363 滅劫御書

げんこうごしよ

ぶつぽう

しゃかい

仏法と社会

1967

ページー15行)

とうせい よ 乱
当世は世みだれて民の力よわし。

しゅじょうしんしんごしよ
393 衆生身心御書

ぶつぽう しゃかい
仏法と社会
2047 ページ 5 行

道

せけん

じほう

そうろう

こんきようみようきよう

まことのみちは世間の事法にて候。金光明経には

ふか

せほう

し

すなわ

ぶつぼう

説

「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」ととか

ねはんぎよう

いつさいせけん

げどう

きようしよ

みな

ぶつせつ

れ、涅槃経には「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説

げどう

せつ

おお

そうろう

みようらく

にして外道の説にあらず」と仰せられて候を、妙楽

だいし

ほけきよう

だいろうく

まき

いつさいせけん

ちせいさんぎよう

みな

大師、法華経の第六の巻の「一切世間の治生産業は、皆

じつそう

あいはいはい

きようもん

ひ

あ

こころ

顕

実相と相違背せず」の经文に引き合わせて、心をあらわ

そうろう

かれがれ

にきよう

じんしん

きようぎよう

されて候には、彼々の二経は深心の経々なれども、

か

きようぎよう

こころ

浅

ほけきよう

およ

彼の経々はいまだ心あさくして法華経に及ばざれば、

せけん

ほう

ぶつぼう

よ

知

そうろう

ほけきよう

世間の法を仏法に依せてしらせて候。法華経はしから

ず。やがて世間の法が仏法の全体と釈せられて候。
せけん ほう ぶつぽう ぜんたい しゃく そうろう

爾前の経の心々は、心より万法を生ず。譬えば、心
にぜん きよう しんしん こころ ばんぽう しょう たと こころ

は大地のごとし、草木は万法のごとしと申す。法華経はし
だいち そうもく ばんぽう もう ほけきよう

からず。心すなわち大地、大地則ち草木なり。
こころ だいち だいちすなわ そうもく

爾前の経々の心は、心のすむは月のごとし、心の
にぜん きようぎよう こころ 澄 つき こころ

きよきは花のごとし。法華経はしからず。月こそ心よ、
清 はな ほけきよう つき こころ

花こそ心よと申す法門なり。
はな こころ もう ほうもん

397 白米一俵御書
はくまいいつぴようごしよ

しんじつ みち ぶつぽう せけん どうり

ちゅうりやく

真実の道（仏法）は、世間の道理そのものです。（中略）

こんこうみようきよう ねはんぎよう にきよう ふか いみ きよう

「金光明経と涅槃経の二経は、深い意味をもった経ではある

こころ あさ ほけきよう およ

せけん

けれども、いまだ心が浅く、法華経には及ばない。それらは、世間

ほう ぶつぽう よ おし

ほけきよう

の法を仏法に依るものとして教えているのである。法華経はそうで

せけん ほう ぶつぽう ぜんたい

みようらくだいし

はない。世間の法が、そのまま仏法の全体である」と妙楽大師は

しゃく にぜんきよう がんい こころ ばんぽう しょう

釈されています。爾前経の元意は、心から万法が生じていくと

こころ だいち しょう

いうのです。たとえば、心は大地のようなものであり、そこから生

くさき ばんぽう ほけきよう

ずる草木は万法のようなものであると。しかし法華経はそうではな

こころ だいち だいちそくくさき かんが かつ

く、心がそのまま大地であり、大地即草木という考え方なので

にぜんきよう

こころ

す

つき

こころ

きよ

す。爾前経では、心の澄むのを月にたとえ、心が清らかなのを

はな

ほけきよう

つき

こころ

はな

花にたとえますが、法華経は、月こそ心そのものであり、花こそ

こころ

と

ほうもん

心そのものであると説く法門なのです。